

表紙写真解説

石が語る歴史—アルベロベッコ

(写真 帝国書院 2011年8月撮影)

ブーツにたとえられるイタリア半島の踵、アドリア海の港町バリから内陸へ向かう道の両側、ぶどうやオリーブの木の間に円錐形の建物が顔をのぞかせる。この地方特有のトゥルッリとよばれる、石灰岩や凝灰岩を積み上げた建物である。石灰岩・凝灰岩は、この地方では土を掘り起こせばすぐにその下から切り出せる最も手軽な建設資材であり、農民は自分の土地から採れる石でトゥルッリを建て、農作業の合間の休憩小屋や納屋として使用してきた。トゥルッリの特徴は、石を外側から内側へ向かって少しずつずらした円錐形の屋根で、モルタルを使わない空積みの技法によることである。その起源は一説ではオリエントで、トゥルッリという名も「円錐形の建物」を意味するギリシャ語に由来する。円錐形の屋根一つにつき一部屋で、農村に点在するトゥルッリは単独か、二つ三つを連結させた造りである。

アルベロベッコは、トゥルッリが密集して形成された街である。街は二つの丘からなり、アイアピッコラ地区には5haの土地に400、もう一つの

モンティ地区には15haに1000以上のトゥルッリがあるという。アルベロベッコの本格的な形成は、1481年にこの地の領主が、周辺の農村から農民を移住させたことに始まる。そのため、農民たちが慣れ親しんできたトゥルッリを新都市建設の際に持ち込んだとされる。一方、言い伝えによると、トゥルッリは石を積み上げただけなので解体も容易で、役人が税を徴収に来るとわかれば一夜にしてトゥルッリを解体し、課税を免れたという。それが領主の苛斂誅求(かれんしゅうきゅう)を生き抜く住民の知恵によるのか、領主自身が王の徴税人の目をかすめるために住民に命じたことか、いずれにしてもアルベロベッコの住民はトゥルッリの建造・解体を繰り返してきた。

最近では、トゥルッリを離れ、より設備の整った郊外のアパートに転居していく住民も多く、かつての住居は土産物屋・ホテルとなって、街は観光地として賑わいをみせている。

トゥルッリの間の細い道をそぞろ歩きながら、トゥルッリの屋根に石灰で白く描かれた模様を見ていく。これらはおもにキリスト教やキリスト教以前の異教のシンボルであるが、なかには太古の時代の呪術的なシンボルもあり、どこかオリエント的である。トゥルッリをながめながら古来ギリシャなど東方世界への窓口となってきたこの地方の歴史に思いをはせるのも楽しい。